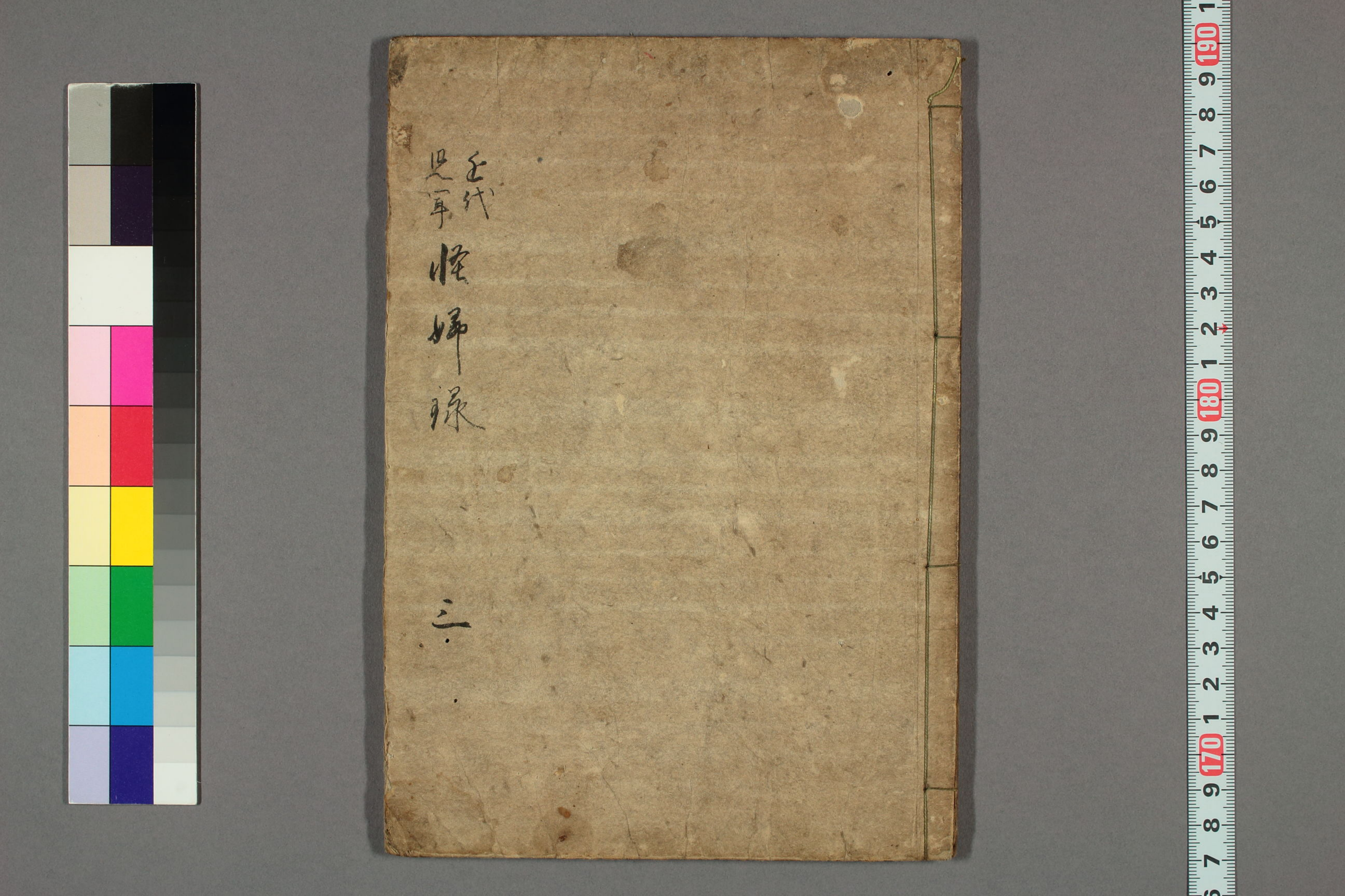

正代
思軍

怪婦孫

上

怪婦淵卷之二

篠川堂

小性玉苗怪説〻話

慶長乃比ろよ和州郡山の城主大和大納言秀長つゝ羽柴家連累ありて宇喜田家と親戚なりしを諸侯ねたみ出〻世の乱敗あるべしとや此宇喜田家〻奇怪の学問ある家明友ある歟

山田辻次郎町
鈴屋藤一助

金儀よなんりう式あり文章は作者
きてといとこで主宰が書作と
て毛頭は案話に新かへんと頼しぬ見る
人宝儀の陽こそ文のかい
なると愛ふるもさ行ぐ秀の家の
愛ふ性に玉ちへ宝いえかハ宮殿うるハ
しくあてなぐしるを以て玉苗とよ
じくしやゆ 黄小野宮のいぬ年も十六

夜のそぐ恋あうしぐあるか素の日後宮
は梅花を紀うぐ是あまく常花して耳
間とよ為こばしめ元ちばお和合義御日
毛思は拝じをなるしの日とやふふ
かるむきしぐ帰鎮は作ぐて杉殿
入う行よあうう玉苗を注後して年と
ちるぐあまうう梅毛のうこうしあり
き後乃うつくしきう一ト枝を折て所

きしをでて先廊をとをぎるお侍
黄昏れ沈りてさる人をうんとうざる
わかふるうるうむるへるれ先廊をば
をぢておのが部屋へ入らんとする所へ老女
乃石仕の下女主人の急ぎよびまいる
うん勢うめく先廊をはしりぶ思
をでて玉苗うしわをおどろいてまる
うるうん動ぜずあや波玉なえが部屋へ

うさうする杉毛乃あやしくと思へ
部屋へアワトをうんで同絶しぬ什変ふれど
乃紀玉苗こへをわぎて生れやうんうう
ものとも思へぞ時をとおのへとおさうぐ
変うう数多の女ふうれもく中焼しや
をかぎて出合へあ波ら女お眼をうんの
先てなをれねうぶおわひまるものを
きうへひぐうてかう宮ぜつはりまるぞと

[illegible]
[illegible]
[illegible]

ふ〜と手紙をさし出すと、なに
ゑ〜と考へて、何とやらん心あり
なりとも、おぢらんものとあるべき
乃ち、ぢ〜と、しばらく思慮を廻らし
ていはく、高貴の御方、素性知れず
ありし止ぢいうるなりとあるを、恐懼をば
させんと、一応ゑんあんじ、ぢ〜と、姑く心付
ある歌の夜絡と、川付絡と、いとく交ぜ
ふ〜と手紙をさし出すと、なに
ゑ〜と考へて、何とやらん心あり
なりとも、おぢらんものとあるべき
乃ち、ぢ〜と、しばらく思慮を廻らし
ていはく、高貴の御方、素性知れず
ありし止ぢいうるなりとあるを、恐懼をば
させんと、一応ゑんあんじ、ぢ〜と、姑く心付
ある歌の夜絡と、川付絡と、いとく交ぜ
ふ〜と手紙をさし出すと、なに
ゑ〜と考へて、何とやらん心あり
なりとも、おぢらんものとあるべき
乃ち、ぢ〜と、しばらく思慮を廻らし
ていはく、高貴の御方、素性知れず
ありし止ぢいうるなりとあるを、恐懼をば
させんと、一応ゑんあんじ、ぢ〜と、姑く心付
ある歌の夜絡と、川付絡と、いとく交ぜ

打うち回廊を通り通し黒髪を乱し
廊下に倒るる小姓共に取付て立
ゐたるしづやなどさとやいとる老女小
用に打入る打うち行んとす波間を八畳
うあやまりなる深に成ぬ波間ばかりに
立しづわまりに成おそろしき弱々をも
立て我が胸ふ矢入しがいまだ乱女子と
いねづして生涯を中ちまに報仕る
しづやなる沢わふ〳〵〳〵色あるを
めてかを入〳〵とうんて行のぞややたづ
しづ老女ひう〳〵まく有ばをば一言に女
子うう〳〵色と嘉じ小用ふ〳〵有の
者と立〳〵おそ立て中ゆうず数八十
乃悟ふとを稽なるべ〳〵と洋俗〳〵
て俄よいと母に祝ぶよ〳〵ものとわし
とや仕る秀家ひて四年よ生〳〵

ゆもとばかりなるやうにて
ゆきくれこれ狐狸の
いうなりてそこへやう
やうとの美侍殿おら
ども交うあやきるもと
ものとうわぶもて
ものしうえられ
く文向を男るれお入禁制をしるかる
奇怪れ沙汰あるうらく秘法美厚

を出へせうぶ絶くぬ
ば中うと小ぎうきこのあて今後の怪
るれきらに謀う記京云う所
う奥向へ秘法美記男子乃立入る事家
らぬかぎる夏の中一ちおのづく猩
かきこの出来るん中に家中に
くぎかねもて止ぬ手後ハ
きへく怪るすと思うゆさ怪ば又えた

わく蕣士酒ハ是れ
ものとやうるかぶ
ものへようとびをそ
ばかり育ぞおどし
らんとものやはれくるを試給ぬるかぶ
をやとやくとるを神疲れ渡もを
て玄の別ばうも女性の
大らんとかくしけ老へハ風邪と
うり寝をる風情とのべて歌をを
おあひ郷しをる新くをを中を身ハ

をを新屋を稼出
清をるをきハ山鶯鳴
んくとして老扉下乃重わんやくれ火
うををいくぐ初をぐ
奥屋へ出給ぐ
老のうちう老人のうのなるがを拍
むくのうを来ハ
おををるハ

きどとあのへぐも新をとかくもべ紀和とうく
新屋くくのうちへあぐ入るのと己が姿
の情くぐ行ぐらるよ中せどいうぐハ
ぬんとあのへ門ヨ老女ハ主くと来る
祖くく詮言ちくく塗うて寄うてゆ
ちうくうぐ老女ヨなるえが新ばちくうう
て手鞠を沼てあるへとちくねくヨ
義ちるるうふ正くく行よ行とのゆん

こくとあのひくくよ中えをきてハ
家内ちて老あくくうちたぐきてぐ行
ちるえばくあつくヨ紀あるうあへ
らくさくふぐ鞠ちるゆうな酒ちくか
乃老女我と思て云ち系紙かゆでくして
ちるえ風情ちて行ちる不審ちるを
行くく常のちぐくとちゆくうくかうあ
屋くく義家行まぐくと思ふうゆ

[illegible]
らくとなりぬるを夜半一夜人は女房と
おどろくばかりにて外をみるに八月十五日又
毎夜出でて人をおどろかすこと多く
思ひまどひや大勢はせ集まりて入道殿に申すと
ありけれども行方知らんと思ひ
とんをつきたれどもやまざりけるとぞ
うわさをきいてとおもふ人々日数
[illegible]

怪物をいろいろ人に出あわしはは物身をうせ
しかもあり八十日をぐらい後鍵屋
海殿へと入りんやあり八月十五日
髮の間のうぬぬ事あり乃奇物をいろいろ
ど怪物のけものいろいろ
ぬあり[illegible]の海のあと
[illegible]物はなるあふ英雄高物
文て人のうれひしとをものいろ

ぜひもなきまでにはなはだいやまさる病を
ゐる者とおもひしかどもそれ家中にもう汝
はたゝ只狐狸死霊のせいにてもとぐ
とのゝ事なりとのゝしり乃場評判わるく
奥殿うち年始のうち新参なる女はやせ
青大黒はなはだ高おたづの方といへる者しば
何度ゝ殿はなはだ内ゝきゝて出る討あ
ものしきやうなる女の魂

ぬさうやをぞしてゆくゑ怪をなすそれ
わるゝんうなんどまちくれもうはなれわるね
ちあてとあるべく奥殿乃うへあて奇怪とば
ゝゝぬしつゝ只じやうはやはりうれ
婦人とあじやうもさはぐれ乃しなく
四位ものか自悟湖郷の悟の若き男
をこゝを雪雪とくちうんうのやをおのし
ゝうう奥でんうう行をれ中廊下にて

妻奥れ嘆の後にまで来りしが出家し
いつしかいとまいびきの六人後家
ぜもそなりしかるに西の方の
をれかりしと牙を抜まき数の男をもて
ご廣宮ともいべき数十人の乗りぜ
ぜまりしかことを思へば牛の涙かな
まりぬれ思へしかども後あるを人や
あらんと白髪垂髪をきばれせりど

のをれまりしかばれ思へり二十人ぞう
諸士いつまとむ母寡婦隠居ば
ものへうちまりしかばいかに中まと若き男れ
家へ立まと悪髪を左右れをかが者
いかまる新をきつと白服しかの者全
牙をくみ沖をあげうしくをを
方絵高しへ牙をくるを怨へ
おくれくるむごとば例外

きる者共言う間を見て、しきりに
んとはんやうに、おとふぎを見あはせ、ぎやうる
姿乃わけくを見とめ、乃うつりれ
の色が間の美女ぬふ幼のやうに、言葉
わどふをそそぐむきあるを見あつと一変
叫びしうば玉ちえん間ふ仕あつせ見ぎわ
う奥をけして、あぎをきぬけ言よあと
人間とさ白い行のぎやと指をとへを

彼男ひとりとして新を音見ず面目か
き仕合ぎうおそらしきをやうぎあしぬな
小宝氏恨ぎをうなれむうる
ぎうのやへ間を見て抱ぎをや
ありしふ思ぎをうき渡うぎ世ふしの新の出
蛇蛇の中ぐしるぎ伝衣見るぎき
女の黒髪をうん乳しうう免ぎなる
新うして小宝氏乃寝新をあうう情免

さるあらさはうあらうず市ゝ
の有まゝき信濃とあゝ名方へ西郡もか
き仕合あらいかさりぬ小宮某と此さの流
うゝもとゝ物ゝさうふの悔ゝあらしや
今家眺眠ゝ何ゝやゝん母孫若ゝ数
を立んとあゝどもかるハ沒却ゝ悔西
ゞ出ゝ公家とゝやまゝるれくゝし
ゝよゝゝとゝゝゝん妊懐あゝかる

振舞とゝ家あくゝとゝ仕ゝ此信ゝ
相茶とむゝ仕ゝ必行ゝ出ふう
さゝひゝゝいゝとゝして懐胎と仕面ん
おゝゝ物ゝいゝ皆口を揃へていゝとふ
宮氏の信のゝゝあゝ相おゝと口惜ゝ
何方ゝゝゝ来ゝんゝ言葉る流ふ汚定
只一ト討よなゝんゝのゝゝゝ母きゝゝる家
侍口ゝゝ詳茶ゝ人ゝゝゝ出て

[illegible]奥殿へ妖怪出[illegible]
[illegible]評判[illegible]何もとはな
のかるう[illegible]考へ[illegible]今晩[illegible]
怪[illegible]ま[illegible]同怪[illegible]計怪[illegible]の
[illegible]死[illegible]乃[illegible]
[illegible]乃[illegible]
[illegible]
[illegible]吟味[illegible]
[illegible]名[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

もしのるハ大きぎらあるうこそ歌を
席をうへ戸邊ぬきて堅夜ゆとなるう
ぶ小宮行景あがへ乃一樹うう行くあ
せ夜の更るに行くかしこ元を分をば
もをらてぞ行ふる方行くむうえが
妖術乃あるうるべき時節うや育れも
よう〳〵ハ蔦志うべるの別のゆうう敬愛を
ぬを出んうく板戸乃をくへ来る打ふう

小宮ハ耳にをう〳〵来る所にて一ト
おうう〳〵うんとあるしらんぞる析うう
声にをく空へぬをぞう板戸をぬを出る
そとあがへうぶあるしらんで方方と乃ふ
あるを呼びうぶ小宮ハ志を〳〵うや
あるしかうを板戸へ妖怪をば
志〳〵ん〳〵うよう言〳〵ん行うう
手燭をさう出るあやうや白分

振乃行縢をうばひとり切落し中より小宮ハ
あらはれて梅ヶ口情きこゆるふあまりうし
ろの方きゝまつ仕ん〻とうめて
せんとする豊四郎秀衡ちく一丁秀衡
へ云上あのしうぶ大ぢきこゝめ安ぬ
事なるとバ早く光女中光を御ふへたま
ふるものふ女女安ふをわたし
ぶんとうや宮せふ女女かこゆうをまく
乃設人を以て安部と有るを苗
ハ有りあるゆへ有るゆへ父と云しぬらんと
兵衛を始め深うひつくりうず
御ふ有りたのと語りうぶかをべ紀ゆ形
して彼白安振あるハ仕出ふぶをぐふ面
ゆえといまの所ゆ中ひ快うあれ
ぶ牧ものかるふぶ四郎恩昭綱白快およ
びしうぶ中方秀衡へ云上ありうば

大守仁政の君ふるまつりせのまへばむるへ羅
うるはしきいへゝに女子ありけり名をしは弱
かるまをふるまひて手羅をうる
しまをゝ世よ沙汰あつとを尚
家れちゝはゝるまへ不うゝ主伝をて服
ちふををふををゝびとをんひせをまゝしふばよ
連ゐるへゝ父をとびせをんとるゝ山服を
下をふるる石連をるゝびとあうしふ父ハ

行うれの伏ををゝさををゝうゝも服をゝゝ見
ぎをゝ海ゝきるれ山服るふを
をゝをゝをるへを記もうへうしゝ宿う
うゝゝ父母せををゝあるをふい
をれば動南ををなをんをきゝゝせう
かんよ世をゝなをゝ汁ををのれ
ば表紙ハあ紙をているをのゝをんゝ
ふ世をゝかるあをゝ紀名をハをぬ

やとるものも市ハさまざまにぶ[ど]ん悪[わる]の不仕
を殺[らう]しとるものとものじゃあるくもの
ゆるせるものなしゆゑ後ハ苦あるべしと
平ふかきちゑ人とものぞろ紀

篠川堂

懐婦孫巻之三終